

# 2012年 『俊頼髓脳』 現代語訳

いほほし

ちぎ

## 岩橋の夜の契りも絶えぬべし

岩橋の夜の約束も破れてしまっただろっ。

かじりき

## 明くるわびしき葛城の神

夜が明けるのがつらい葛城の神。

この歌は、葛城の山、吉野山とのほむまの、

この歌（の背景にある話）は、葛城の山（＝金剛山）と吉野山の谷あいだが、

はるかなる程をめぐれば、**ア**事のわびらひのあれば、

遠い距離を

廻り歩くと、

行き来において苦労があるので、

えん ちやうぢや

役の行者といへる修行者の、この山の峰よりかの

「この山の頂上から、

あの

吉野山の峰に橋を渡したらば、事のわびらひなく人

吉野山の頂上まで

橋を渡したら、

交通の不都合無く人は

ちやうぢや

は通ひなむとて、その所におはする一言主と申す神

まじと通ぬだろっ。「」と思つて、その場所（いらい）にやる一言主と（周りが）申し上げる（葛城山に住む

に祈り申しけるやうは、「神の神通は、仏に劣る

女 神に祈願し申し上げたことには、

「神の神通力は、

仏に劣ることが無い。

ことなし。イ凡夫のえせぬ事をするを、神力とせり。

ほんぶ

（私たち）普通の人間ができないことをする力を、

神の力と称している。

願はくは、この葛城の山のいただきより、かの吉野

どうか、

この葛城山の頂上から、

あの吉野山の

山のいただきまで、岩をもちて橋を渡し給へ。この

頂上まで、

岩で橋を渡してくださいね。

この

願ひをかたじけなくも受け給はば、**ウ**たふるに

願いを

恐れ多くも

受けて下さるならば、

（私が）持ち堪えられる

ほぶせ

したがひて法施をたてまつらむ」と申しければ、

限度まで

法施を差し上げまじよう。」

と申し上げたこと、

空そらに声ありて、「我この事を受けつ。あひかまへて  
空から声が聞こえて、」私はこのことを引き受けた。 必ず

渡すべし。ただし、<sup>私</sup>我がかたち醜くして、見る人  
渡そう。 但し、 私の容貌は醜く、 見た人は

おぢ恐りをなす。夜な夜な渡さむ」とのたまへり。  
<sup>（いつも）</sup>怖がり恐れる。 夜ごとに渡そう。」 と仰った。

「願はくは、すみやかに渡し給へ」とて、心経を  
<sup>（どう）</sup>が、 早急に渡しください。」 と言って、 般若心経を

よみて祈り申ししに、<sup>オ</sup>その夜のうちに少し渡して、  
読んで祈り申し上げたところ、 その夜のうちに 少し渡して、

昼渡さず。役の行者それを見ておほきに怒りて、  
昼は渡さない。 役の行者はそれを見て 甚だしく怒って、

「しからば護法、この神を縛り給へ」と申す。  
「それならば、護法（＝仏法守護のために使役される鬼神）よ、この神を縛ってください」と申し上げる。

護法たちまちに、葛をもちて神を縛りつ。その神は  
護法はあつというまに、 <sup>（つる草を使って神を縛った。）</sup>その神は

おほきなる巖にて見え給へば、葛のまつはれて、  
大きい岩に見えなされたので、 <sup>（つる草がまわりついで）</sup>

掛け袋などに物を入れたるやうに、カひまはぢまも  
掛け袋などに物を入れた際のように、 隙間もなへ

なくまつはれて、今におはすなり。  
まわりついで、 今も（そのまじな姿で）（葛城山に）ついでにやまをうた。

【設問（五）】ある女房が詠んだものだが、この和歌は、通ってきた男性に対して、  
どしどしとを告げようとしているか【での解釈】

（再掲）岩橋の夜の契りも絶えぬべし

岩橋（を掛ける約束をした葛城の神）の（ように）ではないが、（夜の逢瀬も途絶えてしまつたらう。）

明くるわびしき葛城の神

夜が明けるのがつらい葛城の神（のように）私も顔には自信が無い。だから夜明け前に帰って下さいね。